募集句入賞作品（シニア部門）

選者特選

高野　ムツオ　選

鬼の名を賜り蜻蛉生まれけり　　高知県　郵呆

【評】「賜り」はうやうやしく頂戴するという意味。しかし、人間はむろん虫であっても「鬼」の名を喜んで受けるはずはない。ここに作者のイロニーがある。鬼蜻蜓も獰猛に見えながら、ただ、無心にこの世に受けた生を営んでいるだけなのだ。

対馬　康子　選

もうよその子猫になつてゐる動画　　群馬県　吉川　えり

【評】「もう」の一語に、子猫との別れを惜しむ思いと、時の移ろいへの驚きがこもる。かつて身近にいた子猫は、いまや「よその子猫」となり、動画の中に姿を見せるだけ。「動画」という現代的な素材が、会えない距離と時間をかえって鮮明にしている。新しい暮らしへの安堵と淡い寂しさが交錯して、温かくも切ない。

久保　純夫　選

半熟の唇で待つあをあらし　　東京都　大塚　太夫

【評】青葉が横溢する世界。今そこに荒々しい強い風が吹いている。その真ん中に、何ものかを待っている人らしきものが立っている。その人が持つ唇は成熟したそれでも、少年・少女でもないようだ。この「半熟」は人の成長過程の妖しい時間を的確に表現している。

坂本　宮尾　選

仁丹は父の匂ひや昭和の日　　埼玉県　横田　幸子

【評】やや古風ながら仁丹は今も根強い人気を保っている。その独特の匂いはまさに昭和を感じさせる。季語も効果的で、句からは父という存在への変わらない愛慕の気持ちが伝わる。

鈴木　しげを　選

さいたまのさきはひたまふ麦の秋　　千葉県　武部　一成

【評】麦秋の光にみちあふれる埼玉への力強い祝意の句。さきはひの一語に象徴されている。「さ音」のひびきが心地よい。武蔵の国さいたまはかがやく。ねんりんピックにふさわしい作である。

福永　法弘　選

傘を背にしゃがむ道草かたつむり　　埼玉県　福地　敏子

【評】学校の帰り道だろう。雨が少し降っている。急がなければいけないのに、かたつむりを見つけて思わず道草してしまった。傘を背にしゃがむ姿と殻を背負うかたつむりの姿の相似も楽しい。

稲畑　廣太郎　選

青空のあふれさうなる代田かな　　東京都　澄子

【評】代を掻いて水を張り代田となると、最初は濁っていても、田を植える頃になるとその水もだんだん澄んでくる。その水面に青空が映っているのである。日本の美しい原風景が見て取れる。

岡安　紀元　選

見えさうで見えぬ天国鳥帰る　　神戸市　玉手　のり子

【評】天国が見えそうで見えないとは正に言い得て妙である。何ら遮るものの無い大空を一気に上昇気流に乗って帰って行く鳥たちの勇壮な姿を想像することが出来る。視覚では推し量れない様な大きな景を見事に活写した佳句である。

山田　佳乃　選

一冊の絵本のごとく夏は往く　　東京都　斉藤　敦子

【評】夏の日差しに負けないカラフルな色彩が溢れる季節。また長い休暇には様々な体験をし、ひと夏でずいぶん成長する。一枚ずつ色とりどりの頁をめくるように、印象的なシーンが心に残る夏。「絵本のごとく」という措辞に夏の生き生きとした日々がイメージされ、夏が過ぎ去る切ない気持ちがふと蘇ってくるような一句。

大会賞

もうよその子猫になつてゐる動画　群馬県　吉川　えり
さいたまのさきはひたまふ麦の秋　千葉県　武部　一成
鬼の名を賜り蜻蛉生まれけり　高知県　郵呆

優秀賞

満天の星は太古のままに冴ゆ　さいたま市　鳥屋　栄二
ものいわぬ蝉の涙に海がある　神戸市　小谷　徹
点描の夜桜騒く一の宮　さいたま市　本橋　稀香
石榴の実そろそろ洗脳解けるころ　さいたま市　広瀬　三知代
傘を背にしゃがむ道草かたつむり　埼玉県　福地　敏子
青空のあふれさうなる代田かな　東京都　澄子
青空へラムネ飲む子の喉仏　埼玉県　下田　純子
見えさうで見えぬ天国鳥帰る　神戸市　玉手　のり子
紫陽花や時計ばかりの骨董屋　東京都　松﨑　亜紀
しんがりは行く先知らず蟻の列　埼玉県　高野　風声

永き日の言葉あたため返しけり　新潟県　伊藤　一二三

追焚きのやうな晩年二重虹　さいたま市　安部　衣世

厨には西瓜しーんと買つてある　埼玉県　炭心

朝市や今日描く柿をひとつ買ふ　さいたま市　岡村　行雄

仁丹は父の匂ひや昭和の日　埼玉県　横田　幸子

一冊の絵本のごとく夏は往く　東京都　斉藤　敦子

半熟の唇で待つあをあらし　東京都　大塚　太夫

母も乗る回転木馬風光る　埼玉県　神崎　康光

糸取女指先に聴く糸のこゑ　神戸市　高橋　純子

いま春の土踏んでゐる生きてゐる　埼玉県　古橋　淑子